

# 「好き」や「楽しい」を見つけて応援しよう

## 「親ばか」になって才能を引き出す

私の場合、マイナスからのスタートだったのが、よかったのかもしれない。「なんとかして、この子が楽しめることを見つけたい」という一心で、必死に息子と向き合ってきました。だからちょっとした変化に気づき、彼の「才能」をキャッチできたんだと思います。

全盲というハンディキャップをもった伸行が生まれたとき、いろいろと思ひ悩みました。目が見えないだけでなく、発音が遅かったので、なかなか子どもの成長を実感することができませんでした。

どん底にいた私に光が差し込んだのは、伸行が生後8カ月のとき。毎日かけていたCDを、違う演奏家のものに替えたら、それまで大喜びしていた伸行の機嫌が途端に悪くなりました。私はそれを見て、「この子は演奏の違いを聴き分けているんだ」と感じました。

このとき、「赤ん坊に演奏の違いなんて、わかるはずがない」と親の常識で決めつけていたら、今の伸行はなかったかもしれません。

どうしたら子どもの才能を引き出せるか。それは、ひと言でいうと「親ばか」になるということ。子どもの可能性を信

じて、よく観察し、「好き」や「楽しい」を見つめる。「好き」を見つけたら、親はそれを伸ばす環境をつくり、120%応援することです。親ばかになって思いつきりほめ、子どものいちばんの味方である親が、子どものファン1号になればいいんですよ。

そして大切なのは子どもと過ごす「時間」です。「忙しくて時間が無い」というお母さんも、いらつしやるかもしれません。大事なのは時間の長さではなく「密度」だと思います。

「あれもこれも」と欲張らず、優先順位をつけて、できることをやる。私の場合はアナウンサーの経験を生かして読み聞かせをし、食事はできる限り、手作りにしました。でもそれ以外の家事は手抜き(笑)。食事は子育てでとても大切なことだと考えています。

## 子育てをしながら 私自身も育てられた

大事なのは、子どもの「成功」が目的ではないということ。私は伸行に「ピアノで成功させた」と思って育ててきたわけではありません。たとえ伸行がピアニストとして大成しなかったとしても、好きなピアノを通して得た体験はこの子の自信になり、別のことをする上でも大きな財産になったはず。

成功を求めると、期待値ばかり膨らんでいき、足りないところばかり気になってしまいます。たとえテストが60点だったとしても、そこに努力が見えれば「よくやったね。じゃあ次はこまでやろう」と言う。そうすれば、子どもはやる気になります。頭ごなしに「ダメだ」と否定するのではなく、努力を認めてあげましょう。上から目線で言っても、子どもにはプレッシャーになるだけ。子どもの性格やケースにもよるでしょうが、伸行の場合は「ほめて伸ばす」が功を奏しました。

伸行を育てることで、私の世界観も広がり、成長させてもらいました。子育てをしながら、母親である私も育てられたんです。それから待つことを学びましたね。「好き」を伸ばそうとすれば、おのずと「待つ」姿勢が生まれてきます。性急に答えを求めず、可能性を信じて待つことが大事だと思います。

子育ての時間は思ったより短い。それが「子離れ」を迎えた今の私の実感です。だからこそ限られた短い時間を慈しむように楽しんでほしいですね。(談)



ピアニスト辻井伸行さんの母

## 辻井いつ子さん

つじい・いつこ/東京生まれ。フリーアナウンサーとして活躍後、結婚。88年に生まれた伸行さんが全盲とわかるが、持ち前のポジティブさと行動力で育てる。昨年6月の第13回ヴァン・クライバーン国際ピアノコンクールで、伸行さんが日本人初の優勝を果たす。著書に「親ばか力」(アスコム)など。公式サイト「辻井いつ子の子育て広場」<http://kosodate-hiroba.net/>

